

回教徒の生活及メツカ巡禮に就て

大東文化學院講師 田中 逸平

「回教徒の生活及メツカ巡禮」と云ふのが、此の際私に與へられた題目であるが、此の兩者に互つて纏述するのは容易の事でないから、便宜上メツカ巡禮を主として述べて、回教徒生活の概念を一通り明らかにする程度に止めたいと思ふ。

先づ順序として、最初に回教徒としての私の立場を述べて置きたい。回教徒即ちムスリマアニとしての私の教名はハツヂ・ヌール・モハメッドと呼ばれる。これが教名であると同時に一つの資格である。ハツヂとはアラビア語のハンヂ（巡禮する）と云ふ動詞が名詞化して「巡禮修行を終へたる者」の義を有する語となつたもので、ムスリマアニとしての教名にハツヂを冠することは名譽とされてゐる。そこで次のヌールは「光」の義、第三番目のモハメッドは教民として貰ひ受けたる姓である。現に支那人の

姓に「穆」又は「馬」とあるのは大抵皆教民で、これはモハメッドの上の一音だけを漢字で表現してゐるのである。

斯の如く私がハツヂの冠稱を有するのは、巡禮の修行を終了したからであるが、單に私のみでなくメッカの巡禮を終つて來た者には凡て此の名譽ある冠稱を與へられるのである。しかしメッカ巡禮といふことは實に絶大の苦行であつて、一朝一夕に成し遂げられることではない。私は以下に順を逐うて其の苦行を歴叙して見よう。

二

メッカ巡禮は先づ「時」に於ての嚴格なる制限を受ける。即ち巡禮の季節が豫め定まつてゐるのである。メッカに詣でむとする者は毎年必ず回曆十二月の初めに到着せねばならぬのであつて、其の定期に外れた者は參拜の資格を與へられない規定である。なほ別にメッカ巡禮に要する資格としては斷食の修行を要する。回教曆の九月はレメザアネと云つて最も神聖なる月とされてゐるが、斷食修行は其の一月即ち三十日の間續行するのであつて、晝間は絶対に飲食を禁じ、唾液の一滴さへも嚙下することを許さないのである。これは實際體驗した者でないといふと了解の出來ない甚だしい苦行であつて、それも只安座をして行ふのではなく、普通に日常の仕事を續けつゝ嚴格に且頻繁に禮拜を行はねばならぬのであるから

老齡又は羸弱の者には堪へ難い苦痛である。だから此の一ヶ月は教民にとつて最も大切な一ヶ月であると共に、又最も苦難なる一ヶ月であるが、併し此の苦行を終つた者でなければ、教民としての最も名譽なるメツカ朝覲の資格を與へられないから、彼等は死を賭しても之を行ふのである。私は恰も旅行中に此の齋月に會したので、毎日其の苦行を反覆しつゝ旅行を續けたが、可なりの苦痛を肉體にも精神にも感じた。併しアラビア沙漠地帯に入つて日夜酷熱と闘ひつゝ旅を續けると云ふことは殆ど人間業を絶した大苦行であるから、斷食修行くらゐの事に堪へ得ないやうなものは最初から巡禮の資格はないのである。今までにメツカ入を爲し得た者が甚だ稀少であるのは之が爲であつて、日本人中私を除いて行き得た者は今大阪にゐるハツチ山岡光太郎君のみである。此の山岡君は私よりも以前にメツカ入をしてゐるが、それは偶然メツカから使に來たイブラヒムの歸國を機會に同伴して入國したのであつて、私のやうに巡禮者として行つたのではなかつた。其の他にも入國を企てた者は二三あつたが、アラビヤは異教徒を入れない國であるから、何れも妨害を受けて引返した。最近もバクダットまで行つて追返された一青年が私の處へ訪ねて來た。

三

私は恰も支那にゐたのを幸に一個の支那教民として支那語を操りつゝ行つたのであるが、支那では殆

ど各省に回教徒が散布してゐる。居ないのは西藏ぐらゐなものである。だから教民の数は夥だしいもので、明確な事は分らないが、恐らく四五千萬を下るまいと思はれる。併し其の多數の中でも巡禮季節に朝覲の旅に出るものはと云へば五六十人以下である。巡禮を了つて歸つたハツヂが、支那で非常に尊敬されるのは此の爲である。

メッカに朝覲するには北西部の亞細亞から汽車を利用して陸路を行く道と、海路をアラビヤの「ヂュッダア港」まで汽船で行つて、其處から陸行する道とがある。私の最初の計畫では、陸路を中央アジアへ出てバクダットから南下して行きたいと思つてゐたのであるが、それでは十二月の初めに目的のメッカに到達し得る望がなかつたので、止むを得ず海路を採つて一旦新嘉坡へ落ちついた。新嘉坡は亞細亞東部の巡禮者が集合してアラビヤへの便船を待つ發航基點で、回教國のマレーは勿論、其の他ボルネオ、スマトラ等の南洋諸島、暹羅、緬甸あたりから來る巡禮者は、何れも此處で巡禮船の發航を待合はせるのである。支那の巡禮團も一旦上海又は海南島に便宜集合した後に、やつぱり此の新嘉坡へ出て來るのである。

斯の如く新嘉坡は回教徒に關係の深い土地であるから、此處のジャワロードには主として支那回教徒の爲に立てられた寺院がある。其設立は道光十二年頃の事である。當時支那の雲南に有名なる回教學者

の馬復初が居た。此の人が陸路から中央亞細亞を経てメッカに行くのは困難でもあり危険であるからと云ふので、海路を辿つて朝覲したが、其の時新嘉坡に寄航して、土民回教徒の義侠的援助を得、後の巡禮者の爲に足溜まりとして一寺を建立した。それが即ち今日遺存してゐるムスクであつて、此の事は支那の回教史上永久に没すべからざる事蹟である。

私も便船を待つて滞留してゐる間は、毎日其の寺で禮拜を續けた。中々立派な寺で、此の外にも回教寺院として近くのジヨホールにあるものは規模頗る宏壯である。

回教寺院の建築様式は、東京のニコライ堂に酷似してゐる。葺形の圓蓋もあれば、高く尖つた塔もある。此の高尖塔は回教の言葉ではミナレと云つて、毎日一定の時刻に、寺の呼僧が此の塔上に登つて來て、禮拜即ちナマーズの始まることを呼び觸れる。これはバンカナマーズと稱して、恰も佛寺の呼鐘、神社の觸れ太鼓に相當するものであるが、回教ではモハメッドが樂器を嫌つたので、禮拜には一切樂器を用ゐない。只或る一派では除外例として呼報に太鼓を使用してゐる所もあるが、それは極めて小部分に止まつて、大部分は皆昔ながらにミナレの上からバンカナマーズを響かせてゐる。私は茲に回教の面白い宗教味があると思ふ。

此のバンカナマーズの聲が響きわたると、總ての教民は皆嚴然として直立不動の姿勢を取る。道を歩

いてゐる者はピツタリと静止し、病臥してゐる者も坐り直つて黙禱する。其の嚴肅な態度は、恰も我が國民が國歌をうたふ時以上である。其の歌は、

アラ―ホエクベル、アラ―ホエクベル、アラ―ホエクベル、アラ―ホエクベル。アシヘドアリヤイラ
 へ、インラ、ホ〜、アシユヘドアンナモハメドラソラ、シ〜、ハンヤアランソリヤイテ〜、ハ
 、イヤアレルソリヤホ〜、アラ―ホエクベル〜、リヤインラヘインラ、ホ。

と云ふ文句を音樂的リズムを持つた、鳴くが如く咽ぶが如く、何事かを訴ふるが如き美妙な肉聲で、繰返し〜誦吟するのであつて、一たび其の妙音を聞いた者は、何人と雖も皆、自づから天堂に誘はれるやうな心持がするのである。

バンカナマーズは一日に五回宛叫び出される。第一回は晨禮の爲で、時刻としては朝の日出前、第二回は响禮の爲で正午過、第三回は晡禮の爲で、正午過と日没との中間、即ち假に時計で云へば午後三時三十分頃、第四回は昏禮の爲で、日没前、第五回は宵禮の爲で、就寝前、假に時計で云へば八九時頃に叫ばれるのが定例である。此の五回の修禮が即ち回教で五時のナマーズと稱せられるものであつて、教民はバンカナマーズを合圖に何れも一寺の中に繰込み、心を一つにしてナマーズを行ふのである。ナマーズ即ち禮拜は實に回教民の生活の中心であつて、禮拜とレメザ―ネ即ち齋月の修行とは要中の要であ

る。

禮拜が始まる時になると、又、他の僧によつて、例のアラーホエクベル、アラーホエクベルが叫ばれる。アラーホは回教の神の名であつて、普通に世間では之をアラール又はアルラーと呼んでゐるが、アラールとHの音を入れて發音するのが正しいのである。次のエクベルは偉大にして唯一であるとの意で、つまり神を讚美する歌である。此の時寺院内に集まつた教徒は全部が軍隊式に整列し、或は立ち或は跪座して禮拜するのである。其の方法は到底筆によつて傳へることが困難であるが、先づ最初には足の爪先を並行にして立ち、手の拇指を以て兩耳を支へ、次に兩手の掌を凹めて胸邊に集め、次に鞠躬禮を行ひ、次に一種の偏足跪座を行つて右手の示指を前に出し、終つて額を床上にすり附けて坐拜するのが一回禮で、其の一作法毎に黙禱し、一回禮の終には其のまゝ端座を續けて稍久しく讚念するのが例式である。此の禮拜は、幾回も繰返して續行するのであつて、其の回数は禮拜時によつて差別がある。即ち晨禮は四拜、晌禮は十拜、晡禮は八拜、昏禮は五拜、宵禮は九拜と定められてゐる。是等の禮拜の時には、「ハテハ經」を念するのであるが、宗派によつて、默念するのと、教長の誦念に合はせて誦念するとの差別がある。

回教の宗派は之をスキニットとシャールとに二大別する。併しシャール派の勢力は微々たるもので、今日

正統として榮えてゐるのはスキンニット派である。此のスキンニット派は又ハナファイ、ソファイヤ、マリック、ハンベリーの四派に大別されるが、其の中でも最も勢力が大きく、分布區域の廣汎に互つてゐるものはハナファイであつて、支那印度の大部分、アフリカ、アラビアの全土は皆此の教派に屬してゐる。此のハナファイ派にあつては、禮拜の時に口の中で默念するのが定例である。

次に回教徒の禮拜に於て、其の對象となるのは勿論アラホであるが、回教では偶像がないから目に見えない「方向」を其の獨立無二の神アラホのシンボルとして禮拜する。回教でキブラといふのがそれであつて、即ち全教徒は其の居所の如何に拘らず、すべてメッカに在る神の殿堂の「方向」に對して禮拜するのである。だからメッカより東方に在る教徒にとつては、西の一直線上がキブラであり、之と反對にアフリカの如きメッカの西方に位置してゐる地方では東がキブラである。又ロシアの如き北方の國では南がキブラに當ることになる。此のキブラに對する禮拜は、途上でも又自宅に在る時でも、一寺の内で集禮する時でも、禮刻にさへ當れば、處嫌はず行ふべきものであるから、キブラは其の在處に應じて變轉する。故に總ての回教徒に通じて、方向の觀念、時の觀念は著しく發達してゐる。隨つて時計を持つてゐない者でも、其の時季の太陽の運行を見て正確に「時」を察知する能力を具へてゐる。

夕刻の禮拜、即ち晡禮の定刻に埒頭などへ行つて見ると、今まで忙しげに勞働してゐた波止場仲仕が、一齊に荷物を投げ棄て、コンクリートの上に土下座を行ひ、僧の誦する經文に合はせて一同禮拜する有様は、實際外では見られぬ嚴肅の光景である。

四

斯の如く禮拜は回教徒にとつて一回と雖も缺かすことの出来ない大切なる神聖の行事であるから、其の禮拜前には潔齋の爲の禊をする。我が神道では古來禊を以て本としてゐるが、回教徒も亦嚴重に之を行ふ。禊を怠つた禮拜は神が之を享け入れないとしてゐる。

回教の禊には大小二種の方法がある。アブデスといふのが小淨法即ち小禊で、ウースリーと云ふのが大淨法即ち大禊である。此の大小二種の清淨法は汚穢の程度に應じて、それぞれ區別して行はれるのであつて、第一に異性に近づいた者、又は之に類似する行爲のあつた者は全身の穢れであるから、大淨法を施行する。即ち全身沐浴を行ふのである。其の沐浴の仕方は彼等の生活に觸れた者でなければ、一度や二度の話の聞いたゞけでは了解することが困難であるが、兎に角頗る規律的なもので、寺院などでは其の場所まで一定してゐる。南部の地方では寺院の入口に必ず淨水池があつて、其の側で冷水浴をするのが慣例であるが、北支那其の他の寒地では溫浴も許されてゐる。併し全身沐浴と云つても、日本人の

入浴の如く、汚れた身を水又は温湯の中に没するのではない。支那の回教徒などは顔一つ洗淨するにも決して金盥を使はない。そんな事をすれば水が穢れて了ふから、木製の水盥を以て所要量だけを汲んで注ぎかけて洗ふのである。

沐浴の順序も之と同様の精神で定められてゐる。即ち第一には肛門其の他肉體の下部を洗淨するのであるが、此の時には決して右の手を使用しない。これは右の手を神聖なものとするからである。次に下體を洗ひ終ると、其の手を清めて、今度は右の手で口を洗淨する。此の時には一種の齒楊杖を使ふのであるが、それが不思議にも我が日本の房楊杖に似てゐる。ミンワケと云つて楊の一種に屬する芳香性灌木の小枝を嚼み碎いて使ふのである。それが終ると、同じく右の手で水を掬うて、含嗽すること三回、次に鼻孔内に水を吸込むこと三回する。回教民にして口腹又は鼻の疾患に罹る者が少いのは恐らく之が爲であらう。

鼻の洗淨が終ると、次には右手に水を注いで顔を洗ひ、次には頭部を洗淨する。手も脇まで洗ひ清める。そして最後に右の小指に垂れた水滴を飲んで了るのである。以上の順序は、如何なる場合にも嚴格に守るべきもので、此の洗ひ方一つで眞の教民であるか、似せ者であるかと直ぐに看破されるのである。

大淨・小淨、何れも共に洗ふ時には一々呪文を唱へて水の恩を感謝するのであるが、これは水の乏しい地方に生れた宗教として、殊に水を大切にすることを期してゐる。

大淨法に比べて小淨法は幾分か省略的であるが、それでも肛門其の他の下體を洗淨することだけは必ず行はねばならぬ。大小便をした時は小淨法であるが、晝寝したゞけでも小穢に當るのであるから、濫に湯茶を呑んで便意を誘發することは勿論、迂濶に假睡をすることも慎まねばならぬ。之が爲に回教徒は常に身を持つること謹嚴で、隨つて彼等の生活は自づから衛生的である。回教徒は老齡に達しても多くは腰が曲らないと云ふが、これは一日に五回まで或は立禮、或は鞠躬禮、或は坐禮といふ風に、間斷なく筋肉運動を反復するからであつて、單に此の點だけを見ても、回教徒の宗教生活は衛生法に適してゐると云はねばならぬ。

新嘉坡に集まつた回教徒の多數は、日々斯の如き禮拜三昧を行つて待合せてゐる間に、汽船會社では巡禮船を仕立て、之を收容する。船は英國の貨物船である。

私がメツカに行つた時には、五六千人の者が落合つて其の巡禮船に乗り込んだのであつたが、回教徒はカアフィル即ち異教徒を嫌惡排斥して、其手に由つて作られた飲食物は一切之を口にしないことを戒

律の一つとしてゐるから、船中でも決して飲食物の供給を受けない。だから必ず自分専用の食器及び炊爨具を持込んで、自炊し乍ら旅行する。私も鍋と焔爐と食糧品とを携帯の上で乗船して、船からは只水と燃料とだけの供給を受けた。炊爨は貨物船の事であるから勿論甲板するのであるが、巡禮季節は恰も有名なムーンシーズンの時季に當るので、船が紅海に入るまでは殆ど横波の受け通しで、其の間二十四日の航程中には、ともすれば海中に投げられむとする慘澹たる目にあつた。併しそんな中でも五時の禮拜は一回も缺かすべきではないから、一同甲板に集まつてキブラを正し、先達の僧と共に最も嚴肅なる集團禮拜を行つた。其の時の旅行に於て一人の船量に惱んだ者も無かつたのは、恐らく此の規律的生活の爲であつたらうと思ふ。

さう云ふ航海を終つて、やがて紅海に入ると、ちやうど紅海の真中あたりにカムラージと云ふ英國領の小さな無人島がある。英國の回教政策として檢疫の名の下に此處で人別を調べられ、携帯品の検査を受けるために必ず上陸せねばならぬのであつて、検査が終了するまでの間は柵を廻らしたバラックの中に收容され、三日乃至五日ばかり滞留させられる。此の島も當然異教徒の土地であるから、教徒は銘々に皆例の鍋釜を持つて上陸するのである。

カムラージ島での検査が済むと、船は又進航を開始して愈々アラビアのヘツチアズ王國領に入るので

あるが、例の異教徒入國禁止のやかましい國であるから、其の儘直ちに上陸する事は許されない、假令同教徒と雖も一旦はヂユツダアの海關で宗門改をする。宗門改は塔列した一隊の兵士の前で行はれるのであつて、異教徒と認められた者は絶対に入國を拒まれる。稀には嚴重な検査官の眼を昏まして潜入する者もあるが、發覺したが最期、一大事である。私の行つた時にも一名の和蘭人が入つて問題を起したのを見た。教徒は何れも其の前にヂユツダア港前面の島に上陸する時に受戒をするのであつて、戒律は十ヶ條から成つてゐる。着衣も其の時に改めて、皆一様の服装をするのである。其の服装はイハールムと云つて、大幅の白木綿二枚から成つてゐる。一枚は腰に纏うて下衣とし、一枚は肩から掛けて上衣とするのである。だから着衣と云ふよりも縫目なしの大幅白木綿二條を纏うてゐると云ふに過ぎない奇怪な姿であるが、其の姿で波打際の岩に腰をかけてゐる心持は、何とも云はれない程神祕的である。

ヂユツダアの海關での宗門改を通過すると初めて入國を許されるのであるが、町で宿屋に泊ると又一應の取調を受ける。私は支那人同教徒として、ムスタファ、アブズルハマドに泊つて、其處で數日を暮らしたが、其の時期にヂユツダアの港町に集まつて來る者の數は、毎日何萬人といふ大數に上るのである。ヂユツダアからメツカまでは六十哩ある。約二晝夜行程である。普通の地理書には汽車がエルサレムからメジナ、メツカに通じてゐるやうに成つてゐるが、それは誤りで、實際はメジナにまでも通ずる

か通じないかの有様である。乗物としては駱駝の背を借りる外はない。そして夫れも晝間は酷熱の爲に旅行が出来ないから一切夜行である。毎晩日の暮れるのを待つては出發して、朝になると宿泊する。坐席は一頭の駱駝に付いて二つ宛、即ち右鞍と左鞍とに別れて二人分在る。凡てアンペラ式装置の輜で、上には幌がかぶせてあり。其處で兎も角寢られるやうに出來てゐる。之をシヨクドと稱する。又ヤリカブと云つて二人で乗れる装置の木鞍もあるが、これは寢臥に適しないどころか、うつかり睡魔に襲はれたが最後直ぐ顛落する。勿論シヨクドでもヤリカブでも、荷物は別の駱駝に積んで行くのであるから、月下の沙漠を後から後からと大縦隊をして續いて行く駱駝の數は非常なもので、これは確にアラビアならでは見られない詩的光景でもあり、又壯觀でもある。

併し此の沙漠の旅は多くのイスラムにとつて決して氣樂なものではない。凡そ戒律の一つとして帽子も靴も禁ぜられてゐるのであるから、シヨクドやヤリカブに乗り得る者は兎も角、夜も猶熱してゐる焼け砂の上を跣足で歩いて行く多數の者の苦みは一通りでない。咽喉が渴く、全身の水分は刻々發散する、身體は綿のやうに疲れる、何の事はない練獄の惱みである。そんな有様であるから水の需要は烈しいのに其の求める水は何處にも無いのであるから、拔目のない水賣が途中にゐて、法外の高價で水を賣附ける。フラスコに一杯二十錢、羊の皮袋一圓以上もするが、旅行者は争うて皆それを買うて飲み續け

る。時には激しい渴きの爲苦みの餘りに他人の水を暴力で奪うて飲まうとする者さへある。

六

それ程の苦しい旅を續けてゐる間にも、回教徒はやはり定例の禮拜をせねばならぬ。其の邊になるとキブラはもう南に當るが、一同は砂原の上に位置を取つてキブラを正した上、水は得られないから砂を代用して禱をする。之を土淨即ちダエンメと稱する。夕方などに多数のイスラム教民が砂上で駱駝を止めて禱をし、禮拜をしてゐる光景は實に莊嚴である。

扱愈々メツカに着いても教徒は其處で一憩する事すら許されない。宿帳に記名を終ると直ぐに總ての者は身體を清めてカルバの神殿に參朝せねばならぬ。これは絶對の慣例であつて若し即時參朝を怠つた者は監獄へ打込まれるから、ヘトヘトに弱つてゐる者は、輿に乗つて横臥しながらでも行く。無論健全者は一切既足であるから、足は地熱のために焼焦げるやうである。

カルバの神殿は木筋コンクリートの眞四角な家で、其の廣庭は大理石で出来てゐるが、參詣者は絶えず朝觀の經文を聲高らかに誦念しつゝ、其の焼けつくやうな大理石を踏んでカルバの周圍を跣足で七周するのである。長旅に疲れて來た身體で、其の苦行をするのであるから、大抵の者は氣息奄々として殆ど地上に顛倒せんとするが、漸く命からがらで其の勤行を終つて、神殿の傍にある井戸の清冽な水を飲

む時の心持は、世にも快いものである。

此の井戸はイブラヒムの妻ハヂョールと其の子イズマエルとに絡まる傳説を持つ有名なザムザム泉であつて、實に良い水である。飲むとちやうどソーダ水カラヂウム泉を含むだ時のやうな味がする。アラビアの酷熱地にあつて而も年中滾々として濁れず、其の持主たるメツカの市長ハセン家の恒久收入の大源泉として湧出てゐる。傳説の語るところに依ると、昔アダム、イブから二十番目の正統の聖人イブラヒムが其の妻のハヂョールと共に沙漠の中を彷徨して此のメツカの谷まで來ると、ハヂョールが産氣づいた。それで其の邊に清水が無いかと思つて探し廻つてゐると、不思議にも或る岩の間から突然に水を噴出した。それが即ち今日のザムザム泉だと云はれてゐる。だからイブラヒムはメツカに取つて誰よりも大切な聖人の一人であるが、其のイブラヒムから三十代目の傳統を引いて生れたのがモハメッドで、四十九世聖人アルサー即ちイエスキリストからの道統を傳へたのである。現在のカルバ神殿は此のモハメッドが修理したものだといふ事で、其の東南隅に鑲めてある黒石は、モハメッドが嵌入したものであると傳へられてゐるが、多分隕石であらう。メツカでは非常に此の石が神聖視されてゐて、參詣者は皆之を管め又は撫でる。古西洋史家はメツカ巡禮は石の崇拜が本で有史以前から永續的に行はれてゐるのであると信じてゐるが、實際は何時頃からメツカへ巡禮者が行出したのか其の起源は明白でない。但

シモハメツドの唱道に出たのでない事だけは明らかである。

七

ザムザム泉を飲んでホツと一息吐くと、又巡禮者は神殿の外門を出て、ソファ、メルエー二山の間の磐谷を更に念經しつゝ七回駈足で走らねばならぬ。それが終れば參朝最初の勤行は一先づ済んだことに成るから、神殿へ行つて其の由を奉告する。併し此の奉告の出来る者は、謂はゞ残されたる幸福者で、身體の弱い者は勤行の間に日射病で頻々と僵れるのである。奉告が了ると、其處で得度剃髮して初めて自由の身となり、飲み物も被り物も與へられ、宿屋で休息することも許される。

旅宿生活に移つてからも勿論一日五回の禮拜は缺かさず執行する。但し此處での禮拜はカルバの神殿を中心に行ふのであつて、最早キブラは一定せず、四方から禮拜するのである。私の行つた時には集禮の教徒数が百萬以上もあつて、マーブルの禁庭の回廊の下だけにでも三十五六萬人ゐた。四方から禮拜するのは四つの教派のそれによつて禮拜の型が異なるからである。

それで禮拜の時には四方の高臺の上に、各四派を代表するイーラム即ち先達の教長が立つて、各其の教徒を指揮しつゝ、同様に同時に禮拜する。此の儀式は毎日同じ形で繰返して行はれるのであるが、何しろ暑い最中の事であるから、これ亦一種の苦行である。

宿屋では皆自炊である。私の宿では四川省から来た者が七人、中には六十歳、七十歳の老人も交つて、土間に絨氈を敷いた上で自炊生活をした。自炊であるから宿料は其れ程でもないが、何しろ水の乏しい所で、毎日沐浴をするのであるから、水代だけでも莫大である。そして一朝水を得る道が盡きた日には生命の問題である。それでなくてはへ身に迫る苦熱は日夜堪へ難い程であるから、肉體の虚弱な者は續々死亡する。私と同室の者も一週間に五人までが僵れた。即ち生残つたのは私と今一人とだけである。要するにアラビアでは水のきれ目が命のきれ目である。

併し此處で死ぬ者は決して死を悲まない。メッカの聖地で死ぬのは名譽である、難有い事である、本望である、我々は今、天國を近くに望んで死ぬのであると従容として死に就くのである。尤も巡禮者がメッカで死ぬのは多く到着後一週間内位が多い。其の危険期さへ通過すれば一應は大丈夫で、其の間に肉體が鍛へられるから、日夜の熱苦も辛うじて堪へられる。とは云ふものゝ、其の忍耐は並一通りの苦しきではない。實例を云はなければ分らないが、夜中に林檎を食べて、其の剥き捨てた外皮を朝になつて見ると、恰も木片のやうに其の林檎の皮がボキボキと折れるのである。濡れ手拭などは十分と經過しないうちに乾燥する。私は其の苦熱の中を、毎日盛に水を飲み、又浴び、タオルのやうなものを身體に巻きつけた上から絶えず水を注ぎ續けつゝ漸く死の危険から免れ得たのである。

回曆十二月の初頭になると遠征が始まる。駱駝の大縦列が又編成されて、白衣の大部隊は新にアルファツテの山谷に行軍するのである。出發は例によつて黄昏時からで、途上ミナの山谷で一泊する。こゝに難有い事に水がある。會て埃及の或る貴族が、白衣の道者たちの慘澹たる苦難に同情して、此の岩山の中で水源を發見し、水道を敷設したのである。併し水道の外には宿舍の設備も何にもない。金を持つてゐる者は天幕を張つて寝る事も出来るが、そんな準備の無い者は皆地上に轉んで露營するのである。そして翌日は目的の盆地に入つて其處に三日間滞在する。熱國のアラビアで、而も四方を山に遮られた盆地であるから、殊に烈しい暑さである。それで皆が豫め水を携帯して行くのであるが、準備して行つたくらゐの水量では不足であるから、一日三圓以上の高い水代を拂うて、三升、五升と購入しては浴びるやうに飲む。而も其の水と云ふのが、中に予子の泳いでゐる素性の知れない水である。此の超絶的な暑熱と論外な不衛生的生活との爲に、此處では毎日何百何千と云ふ死亡者がある。私の行つた時には僅三日の間に八千と云ふ大數の死亡者があつたが、例に依つて聖地で死ぬことを人生の本懐としてゐる彼等は、アダム、イブの發祥地と云はれる此のアルファツテの山谷で死ぬことを以て人間の源に歸るのでと確信して、樂んで死んで行く。死體は棺を用ゐず、當人が今まで纏うてゐたイハラムで包んで沙を掘

つて埋めるのであるが、暑熱のため一ヶ月経たないうちに分解し盡して、綺麗に無くなつて了ふ。掘つて見ても骨一つ出ないと云ふ事である。

アルファツテの苦しい三日間が終ると、再びミナ山谷へ引歸すのであるが、其の途中にあるムズダリファエの峠で一宿する。此處では誰も睡眠せずに夜を徹して語り明かすのが古來の慣例になつてゐるが、其の機會を利用して世界的の汎回教運動を策するものがあるので、英國では殊に此の一夜を恐れてゐる。併し之を詳しく語ることは止さう。

ムズダリファエの一夜を語り明かして、再びミナの山谷に歸ると、其處では、一同によつて感謝祭が開かれる。今まで着てゐた白衣は脱ぎ捨てられて元の通常服装に復り、手づから犠牲の羊又は駱駝を屠つて神にも捧げ、銘々も喫して互に無事を祝福する。それが済めば、後は只メッカに再歸して、約一週間に互る勤行の事無く終つたことをアラ・ホの神殿に奉告するばかりである。メッカ巡禮即ちメツカハシはこれで完全に終つたわけで、それからはメディーナ其の他諸方の名所古蹟を見物して廻る者もあるが、メディーナは回教修行の巡禮とは何の關係もない。此處は曾てモハメットがメッカを逐はれて赴いた所、其の聖陵のある所、古い寺院の在る所に過ぎない。隨つて本格の巡禮はこれで終るわけである。

併し彼等の旅行はそれで終つたのではない。みんなは、夫れから又海陸思ひ思ひの路を取つて各自の

國に歸つて行くのであつたが、私は行つた時と同じ様に船便で歸つた。此の歸り路で、今まで緊張してゐた精神が急に緩んだ者は又ポツクリと死んで了ふ。脆いものは人の命である。それ等の屍體は無雜作に白布に包んで海中に投込まれるのであつて、苦難を以て始まつたメツカハンデは又苦難を以て終るのである。昔の支那人は、「古來征戰幾人カ回ル」と云つたが、メツカハンデに赴いて無事に還る者も實に稀少である。さればこそ前にも述べた通り、メツカハンデを終つた者はハツヂとして郷黨に尊敬され、白い頭巾を冠り、集會の時には人の上席に据ゑられ、長老として推重されるのである。

九

メツカ巡禮が何時から始まつたか分らないこと、それがモハメツドの創始に屬するのでないことは前にも一言したが、少くともモハメツドが古道復興の熱心なる運動者であつたことだけは事實である。

モハメツドが出た時のアラビアは、其の民族の持つてゐる古道が廢頽して外教の勢力が跳梁してゐる時であつた。耶蘇の救世運動も其の遺教も殆ど忘れ去られて、僧尼は墮落し、カルバの神殿は、隣國から侵入した拜火教や小乗佛教の爲に冒瀆されて、メツカの神聖なる神の宮居には鬼神の像が安置されてゐるといふ有様であつた。

モハメツドは此の有様に公憤を感じて、遂に猛烈なる宗教的戰士として立つたが、彼の志は只古道の

復興にあつた。だから彼は宗教改革の爲に闘ふたが、併し民族の宗教的傳習は之を改めようとしなかつた。現に今でも回教徒の間には日本の追儼に似た惡魔征伐の古式も残つてゐるし、其他、盆と正月とを一緒にしたやうな儀式が幾許も行はれてゐる。メッカ巡禮者の行事の如きも皆モハメッド以前からの原始的働作である。モハメッドが宗教的威令を揮ふやうになつてから改めた事はと云へば、恐らくキブラと禮拜の回数との改正のみであらう。

モハメッドのヘデラ以前は、メッカではカルバの神殿に直禮し、他の地方にあつては其のキブラに間接禮拜したものであつたが、モハメッドがメディーナに逐ひ出されて以來は、カルバをキブラとする古習は全く止んで、ベテルモカンドス即ちエルサレムの清淨宮に向つてのみ禮拜が行はれた。此の事は愛教精神に燃えつゝあるモハメッドの心を激しく刺戟した。彼はメッカの聖地恢復の爲に決死の奮闘をして遂に其の目的を達すると、斷然嚴命を下して、今日以後メッカにキブラを定めよと言渡した。今日の如くカルバが回教徒唯一の大本山となつたのは、其の以後であつて、此の事はモハメッドの宗教運動に於ける最重要の事蹟であらうと思ふ。

十

以上私はメッカ巡禮を中心として回教徒の生活を略述した。これで私の言ふ事は略ぼ盡きたわけであ

るが、此の機會に唯一言申し添へて置きたいのは、我が日本では回教に關しての注意が餘りに闕けてゐると云ふ一事である。

回教徒の間にも我が日本の神道と同じくミンギの風習がある事は既に述べて置いたが、回教は其の一名を清真教又は潔教と呼ばれるだけあつて、食物も穢れたものは口にしない。肉食はするが教徒の屠つたものでなければ決して食はない。又嚴重なる禁酒を斷行して、之を三度犯した者は死に致される。煙草の事を教典に何とも書いてないが支那人教徒は之をも禁じてゐる。だから肉體は實に強壯である。支那人で戦線に立つて眞に奮闘する者は皆回教徒であると云はれてゐるが、これは體力が強く、又、集團生活の訓練を経てゐるからで、随つて其の武力は大したものである。是等の回教徒は、世界中同一の言語を用ゐてゐる事で有名であつて、例へば支那人と雖も、漢字を學ばず、全然アラビヤ文字で用を達してゐる。だから飽くまでも頑固に其の宗教を守り、其の舊習を守つて、之に反する者には、其の集團的武強の力を以て何處までも當らうとする。

ロンドンの有名な Lothrop-Stoddard は、*The new world of islam* なる著述を發表し、世界の眞の平和は、有色人種對白色人種の戦争を経た後でなければ來ないとし、其戦雲を捲起す中心は必ず回教徒であらうと論じ、頗る其の動靜に注視してゐるが、其ロンドンには貴族を中心として回教の寺院が建て

られてゐる。以て英國の對回教徒政策の如何を知るべきである。回教徒の多數を隣邦支那に有してゐる所謂同文同種の國として、我が日本が回教徒近來の覺醒に眼を注ぐことの必要なるは云ふまでもない事であつて、單に有色民族としての特種の見地からばかりでなく、學術方面に於ても今日尙未開の分野として放置されてある回教の研究に新なる斧斤を入れることを怠るべきではなからうと思ふ。現に馮玉祥對蔣介石の宣戰の裏面にも寧夏の回教徒の反亂がある。印度問題の核心にも勿論回教徒、ヒンズスターニ、パーシの三角關係がある。從來のイースタンクエツションは正にアラビヤ問題となりつゝある。日本人は有色人種の第一線に立つて世界に對する以上、大にイスラムに就いて考へねばならぬことであると思ふ。

ツエツペリン號の飛行を見て

井田 磐楠

大ふれの空ゆく御代となりけり

人の力の大きさを讃ふ